

大正・昭和期の助産録に見るリプロダクションの変遷

松岡悦子（奈良女子大学名誉教授）

本発表では、大阪市のある助産所の 1914 年から 1978 年の助産録をもとに、リプロダクションの状況について、出産を介助する側、産む女性の側、出産自体の様相、死亡率などの指標の変化、医療化の過程について明らかにし、リプロダクションが社会と密接なかわりを持ちつつ変化してきたことを述べる。

助産録は全部で 51 冊あり、3 代にわたる産婆、助産婦が 9876 件の出産について記録している。3 代のうちの初代のマツ (1862-1950) は無免許の産婆であったが腕が良く、多くの出産を介助した。その娘のトミ (1891-1984) は大阪の緒方助産婦養成所で免許を取得し、3 代目は 2 代目のむすこの嫁の幸子で (1913-2000)、やはり緒方で免許を得た。助産録に記載の出産の 82% が自宅出産、17% が助産所での出産 (1952 年に助産所を開設したため)、1% が病院を含むその他の場所での出産となっていた。また、初産の割合は全体の 22%、経産が 78% となっている。

この助産所で出産した女性たちの記録によると、初経の年齢は 1964 年まで 15-16 歳の間で推移しているが、1965 年以降次第に下降し 13-14 歳の間で推移するようになっている。女性が第一子を産む年齢は期間を通してだいたい高くなっているが、1945 年から 1951 年までは 23 歳以下に低下している。また、35 歳以上の産婦の割合は、大正期には 20-30% 存在し、1941 年から 1946 年までは 20-25% と一時的に増えるが、1950 年代後半からは 10% 以下へと低下している。

出産の様相について見ると、分娩の大部分が夜中から午前中にかけて起こっており、現在のように午後 1-2 時にピークが来る形と大きく異なる。助産録では、死産の割合は 1951 年まで次第に減っているが、1959 年から 66 年まで赤ん坊の仮死の割合が異常に高くなる時期が見られる。この時期の助産録には、ブジーを入れる、ひまし油を飲ませるなどの陣痛誘発に関する記載が頻繁に見られる。またそこには、「〇〇医師の指示によりブジーを入れる」のように、医師の名前も書かれている。したがって、医師が頻繁に出産に関わるようになる時期と仮死の増える時期が一致している。

助産所には無床と有床があり、無床の場合は産婦の家に外出いて自宅分娩を行い、有床の場合には助産施設かあるいは産婦の自宅で出産介助を行う（この助産所は 1952 年に有床となった）。医療法第 19 条では、有床助産所の場合嘱託医を持つことが定められており、嘱託医と良い関係を築くことが助産所にとっては必須であった。それは、異常分娩の際に医師の助けを借りなければならないからであり、そのためには日ごろから仲良くしておかなければならないと思われたからである。3 代目の幸子と同年代の助産婦の話によれば、医師と仲良くする方法として、医師を往診に呼んだり、助産婦が医師の診療所に手伝いに行ったり、産婦に少しでも異常があれば医師の所に行くように勧めたりしたそう。医師と仲良くする方法の一つに、ブジーを入れることもあったとのことである。つまり、医師との協力関係を維持することが不可欠であったために、助産婦が積極的に出産の医療化に手を貸す側面があった。

また、赤ん坊の体重は 1941 年から 1950 年頃にかけて大きく低下しており、その後だいに増加する。これは戦争と戦後の食糧不足の影響が大きかったのではないだろうか。

以上のように、助産録を通してみると、女性の生殖活動が社会状況や政策と密接な関係を持ちつつ変化してきたことが明らかになる。また歴史的に見ると、過去のリプロダクションは現在よりも多様な形で存在していたが、現在はある型はまっていること、またその画一的な形が 1965 年頃に作られ、そこから現在まで続いているように思われる。現在のリプロダクションをより広い視野でとらえ直す上で、過去のリプロダクションを知ることは有意義だと思われる。

キーワード： 出産、助産婦、助産所、医療化